

「下の句」を大切に

航空開発実験集団司令官 空将 織田邦男

仮に毎日1千万円使うとしよう。1兆円を使うには何年かかるだろう。正解は274年である。1兆円というのは我々の想像を絶する莫大な金額である。日本は現在、公債残高をはじめ国と地方の借金総額が約1000兆円を超えると言う。しかも毎年約30兆円増え続けている。さすがに日本の将来に不安を抱いていない人はいないだろう。しかし政治家、マスコミを含め日本全体としてどこか他人事でせっぱ詰まった危機感は見られない。もはや落ちるところまで落ちなければダメなのか。自衛隊生活も最終コーナーに差し掛かった今、将来の日本を憂うことが多い。「自由には責任が、権利には義務が付随する」という当たり前の摂理を、戦後日本がないがしろにしてきた結果だ。「自由と権利」は主張するが「責任と義務」という「下の句」は無視する。典型的なのは数十年前の革新都知事の発言だ。当時、ある高速道路建設をめぐって周辺住民の反対運動が起こった。代表的戦後平和主義者たる革新都知事は学者出身らしく西欧の諺を引用して反対運動に迎合した。「一人でも反対があれば、私は橋をかけない」と。これには実は「下の句」がある。だが、彼はあえて言わなかった。「だから冬でも泳いで渡れ」という「下の句」を。「高速道路は作らない。だから交通渋滞が起きても我慢しろ」と何故言わないのか。その結果、世界でもワーストを争う首都交通事情になってしまった。米国のニューハンプシャー州に行った時、米国友人の説明にいたく感動した。ニューハンプシャー州は消費税がない。その代わりに消防署がない

と言う。「州は消費税をとらない。だから火事になっても自分で消火しろ」ということだ。州民投票で決めたと言う。「下の句」をしっかりと認めた上での州民の選択。さすがは民主主義の国だ。「下の句」は通常、耳に痛い。だから人気取りの政治家は言及を避ける。これをポピュリズムと言う。30数年前の防大在学中、尊敬する学校長がある席で「ミノベはオカマだ！」と言われたことがあった。当時、意味が理解できなかった。30年を過ぎた今、ようやく合点がいった。その気にさせて、責任を取らない人、なるほど「オカマ」もそうだな、、、と。耳に痛い「下の句」を言って初めて政治家は政治屋でなくなる。「自由と権利」は主張するが「責任と義務」は忌避する無責任体質は戦後60年を経て国民に蔓延した。成田空港建設に反対した人が成田空港を恥じらいもなく利用する。日頃、日本国を悪し様に言う「反日日本人」が日本国パスポートを持って海外に出かける。日教組活動で有名な先生が自分の子供を私立の学校に入れる。「公立学校は荒れているから」と。原子力発電に反対している人は「エネルギーの1/3は原発だから、日に8時間は停電で我慢しよう」と何故言わないのか。渡航中止勧告されているイラクに自らの意思で入っておきながら、拉致された途端「何故、日本政府は助けようとしらないのか」と抗議する。「公務員は減らせ。でも公共サービスは今まで通り低下させるな」では、駄々をこねる子供と同じではないか。非武装中立論者は「万一侵略されることがあったら、その時は殺されようが、自由を奪われようが、それはリスクです」とは決して言わない。臓器移植に反対する人は、臓器移植しか助かる見込みのない患者に「だから、あきらめてください」と言ってこそ責任ある人間だ。国家は「打出の小槌」ではない。国家に対し要求だけし

て義務を果たさなければ借金が増えるのは当然だ。言うべき事を言わず、成すべき事を成さないのが、何時から恥でなくなったのか。かつての日本では、恥は死に値した。権利の主張は控えめでも、義務は当然の事とし、責任は死をもってでも果たす武士道の国だった。西欧にはノーブレス・オブリージュという言葉がある。高い地位に伴う道徳的、精神的義務を表す言葉だが、高い地位でなくても、一般庶民が責任と義務を果たすのを当たり前としたのが日本だった。大正末期から昭和にかけて駐日大使を務めたフランス人の詩人ポール・クローデルは、こういう日本を次のように述べた。「日本は貧しい。しかし高貴だ。地上に決して滅んで欲しくない民族をただ一つ挙げるとすれば、それは日本だ」と。アインシュタインも訪日時、「私は神に感謝する。神がこのように素晴らしい国を造っておいてくれたことを」と日本の精神文化を賞賛した。1000兆円の借金に象徴される日本の精神文化の現状を見る時、我々のご先祖様に顔向けできるだろうか。今の日本、身体を張って責任と義務を果たすのは、武士道継承者たる自衛官しかいない。自衛隊は日本の美德と精神文化の最後の砦だ。こういう意気込みで来年も、いや日本人として命ある限り「下の句」を大切にし、「責任と義務」を果たしていききたいものだ。

